万葉歌の魅力をさぐる―⑥

時空を超える浦島歌

常世辺に　住むべきものを
剣刀　己が心から　鈍やこの君
（巻九―一七四一）

この歌は「水江の浦島の子を詠める一首」と題された長歌に続く歌です。意訳すると、〈せっかく常世の住人だったのに、自分から現世に帰ってきてしまって。馬鹿な男だ。〉と、ちょっぴり羨望を交じえながら嘲りからかう歌といったところです。

昔話の定番の一つである浦島太郎によく似た内容の歌で、丹後国風土記逸文や御伽草子にも類話がみられますが、いずれも現在伝わっている昔話とは少し内容が違います。

万葉歌のなかで浦島子が滞在するのは、海の底の竜宮城ではなく海の彼方の常世国です。尋常小学唱歌にあるように亀を助けたりはしませんし、タイやヒラメの舞い踊りもありません。神の女と共に、海神の宮で不老不死に暮らすのです。ところがある日、父母に報告をと思い立って故郷に帰ります。再び常世に戻るためには絶対に開けてはならない、と妻に言われた小箱を持って…。この後の展開は、どうぞ万葉集で確かめてみてください。

今もよく知られるこうした昔話が、すでに万葉集に載っていることにも驚かされますが、この歌は、明治時代には海外にも紹介されていました。

写真はそうした例のひとつで、明治二十七（一八九四）年に出版されたドイツ語訳本です。全ページにわたって多色刷りの挿絵が盛り込まれていて、見るだけでも楽しめます。この本では、古今集の歌や近代詩も紹介されてはいますが、ほとんどが万葉歌です。日本文化の源として、オリエンタルな魅力を感じさせたのでしょうか。

歌に詠まれている、理想の生活を自分から捨てる人間への「鈍や」という思いは、現代でも十分理解できる感情といえるでしょう。約千三百年も昔の人が詠んだ歌が今に通じ、中世・近世を経て現代の私たちに身近な昔話とも関係が深く、欧州の人々にも享受されていったのです。

万葉歌には、こうした時代性や地域性を超えた広がりを持つ、奥深い魅力があるといえそうです。

（万葉古代学研究所主任研究員　井上さやか）

『東の国からの詩の挨拶』より